

人 称 詞 考

工 藤 力 男

はじめに

一 柳田國男の予言

本稿は、日本語の人称詞、なかんづく「わたし」「わたくし」を対象とする考現学のささやかな実践である。その

言語の未来を見通して的確に予測することはなかなか難しい。

人称詞をめぐる、日本語における音声と文字の関係、戦後の言語政策の経過、報道機関の運用実態などの問題点を描き出したい。標題の「人称詞」は「人称代名詞」の略称

金田一春彦「1942」は、先の大戦中にガ行鼻濁音を論じ、杉並区の都立第十中学校生徒を主対象とする調査に基づいて、次のように書いた（原文は横組み）。

であり、本文中でもこれを用いることが多い。用例はつとめて新しいものに求めた。年次を記さないのは本年のものである。文献の公刊年次は基督暦で角括弧内にアラビア数字横書きにし、書誌は簡素を旨とする。

大阪方言のごときは、現在では〔o〕音の方が一般的となったもののようである。わが東京山の手方言も今、〔o〕音が衰え〔e〕音が栄える方向に二三歩進んだ状態にあり、この傾向が続いたならば将来大阪方言の

ように「ゴ」音が一般的だという状態になろうとしている、と言えるのではあるまいか。

「結びの言葉」には「「ゴ」を標準音としてこれを擁護し普及せしめようとするのは、時流に逆って棹さす嫌がある。」ともある。

さて現状はどうだろうか。七年前に出た第二十期の国語審議会報告書「1995」には、「最近、東京をはじめ従来のガ行鼻濁音を有した地域の多くで、若い人を中心にこの音を使用しない傾向が見られる。」とある。半世紀余を経てなおこの状態である。つまり変化は意外に緩やかで、金田一氏が「なろう」としている「と言ったほどには、著しく進んでいないのである。反対に、水谷修「1987」は、本来鼻濁音地域ではない名古屋で鼻濁音の聞かれることを報告している。鼻濁音の学習による意図的な使用と解釈される。

金田一論文の四年後、柳田國男「1996」は次のように書いた。

ボクといふ代名詞、人が自分のことをボクといふ日本の言葉は、今にきつと使ふ人が無くなるであらう。私はそれを予言することが出来る。

固有日本語の語頭に濁音が立つことは音韻法則に抵触する。

そのことを踏まえて、「バビブベボの音を以て始まる言葉などは、よく気をつけて御覧なさい。半分以上は有難くない言葉」なのだから、ボクはやがて捨てられるだろう、というのが柳田の見通しであった。ボクと対比されるワタクシは古い歴史を有する語で、上品な慎しみ深い言葉と認められていたが、長すぎる缺点があるので、短くしてワタシ・ワシなどが生まれた。ワタクシはその由来が知られていない。柳田はそう書いている。ちなみに、柳田は日常いづれを用いたのだろうか。

そのボクについて三島由紀夫「1959」の発言がある。

私は小説ではない随想の文章に「僕」と書くことを好みません。「僕」という言葉の、日常会話的なざんざいさと、ことさら若々しさを衒ったような感じは文章の気品を傷つからであります。私は「僕」という言葉は公衆のまえで使う言葉とは思いません。

事は、柳田の予言どおりにも、三島の志向したようにもならなかった。明治時代の書生が広めたと言われるこの人称詞はいよいよ健在で、今や論文にも講演にも用いられる。固有語の語頭濁音は今なおページラティブの効果を保つものが多いが、その消長も一様ではない。外来種の華麗さの

陰に和語らしさが隠れた「バラ」のような語もある。ボクは一人称の代名詞として日常化しながら、漢語出自ゆえに価値の下落を免れたのであろう。

二 朝日新聞の振仮名から

昨冬、『朝日新聞』の読書面で珍しい表記に遭遇した。四方田犬彦『ソウルの風景』に関する小沼純一の短い書評に「すぐれて私達^{わたしたち}が住む日本を照らし出す批評である」〔2001.11.25 朝刊〕とあった、その振仮名の意図が理解できなかつたのである。

この面がいかなる方針で編集されているか、わたしは全く知らないのだが、まさか一字一句を執筆者に問い合わせる紙面を作るわけではあるまい。むしろ、依頼原稿は筆者の意図を尊重し、手を入れないことを原則としているのではないか。そう推測するのは、他の紙面では固有名詞以外に振仮名を見ることがまれなのに、読書面にはそれが多いからである。この日の読書面三ページには、「洪昌守^{カウチャウズ}」^{テクニカルタイム}「専門用語」を含む五十六箇所を数える。それらは社外執筆者と編集委員のものに限られる。社内の記者が書いたと

おぼしい文章では、中国広東語の「飲茶^{ヤムチャ}」だけ。すべて常用漢字の音訓外のものである。これは、国語政策による諸制限によらずに書かれた文章でも、書き手の意図を尊重して振仮名で処理するからであらう。ひるがえってこの文章のばあい、「私達」は「わたしたち」であると、執筆者が編集者にあえて告げたのか。それとも執筆者の意図とは無関係に、「達^{たち}」は常用漢字の音・訓にあらずと判断した編集者が、ついでに「私」を「わたし」と読み、これも常用漢字の訓にあらずとして施したのか。

その解決の緒を朝日新聞社「1988」に求めた。冒頭に「記事表記の原則」四箇条があつて、常用漢字など国の定めた表記原則に基づくことが示される。続けて「A 漢字」の一―三がある。その三を引く。

三 ただし、次の場合は、表外字または表外音訓を使つてもよい。

(1) 固有名詞、(以下省略)

(8) 寄稿原稿で言い換え、書き換え、または仮名書きが困難なもの

(9) 一般原稿でも適切な言い換えがなく、仮名書きでは意味が分りにくいもの

(8)(9)には、下にカッコして読み方を示すこととして
いる。カッコ書きすべき読み仮名が、今は振仮名に変わっ
ているのだろつ。

次は「B 漢字と仮名の使い分け」である。

二 代名詞《平仮名》おれ、あなた、どなた、だれ、

(九語省略) どちら

《漢字》私、僕、君、彼、彼女、自分
これによると、人称代名詞「私」の使用には何ら問題がな
いことになる。この字の訓はこれでは分からないが、この
紙面の編集者は「わたくし」と読んでいるのに、右にも書
いたように、執筆者は「わたし」と読むことを要求したの
だろうか。かくて、わたしの疑問は解けなかった。たまた
ま本稿の仕上げの段階で読んだ同紙八月三日の読書欄、山
崎浩一氏の短文に「職人の工房を覗き見る幻暈」とある。
この振仮名は執筆者によるのか、編集者によるのか、ぜひ
知りたいものである。

今夏の読書面「2002.6.2」では、右の推測に反するかの
ような事例に遭遇した。中原道幸「2002」を紹介する水原
紫苑氏の短文中に、

批判は批判として、「宣長さん」が封建制度の抑圧

の下で打ち立てた「私」を著者は深く味わい、評価
する。

とあるものである。推測で論じてはならないので原典に就
いて見た。中原道幸氏の膨大な遺稿をまとめたこの大冊、
第六章は「宣長さんと「わたくし」と題されている。こ
こには、長い年月を高等学校の教壇で過ごした氏の細かな
配慮があるのではないかと思う。宣長の『私淑言』を論じ
たこの章の(二)「私 遺言」の節に次のくだりがある。

山田の紙商への養子は二年間で離縁。そして、脱商人
の勉強を士儒書生の間で数年。この間、私(ひそ)
かにためされきたえられてきた私(わたくし)である。
以後は「私(個)の解放」「自己(私)主張の肯定」など
と見えるが、水原氏の文のように振仮名をつけていない。
中原氏には、現代の日本人が「私」の文字をともに読ま
ない実情に対する憂えがあったのだ。わたしにはそう思わ
れてならない。言わば同憂の先人である。ちなみに、本書
における氏の一人称は「わたし」である。かくて、この
「私」は、水原氏の原稿のままだと推測するものである。

三 韓国人の日本語

昨秋、わたしは次のような事態も経験していた。

日本放送協会の『ラジオハングル講座』入門編。一昨年度分の再放送だが、十一月号のステップ²³、一人称を学習する課である。テキストでは、「나」に「私」と書き、謙遜の一人称詞「저」に「わたくし」と書くことで徹底していた。それを見て、遂にここまで来たか、というのがわたしの感慨であり、本稿の契機になったのである。

この講師は「私」の訓を「わたし」と思いこんでいるとしか考えられない。ソウル生まれで六十歳代の韓国人が日本の言語政策を熟知しているはずなく、日本語の教室、あるいは日本人の運用する現実から学んだに違いない。その背景が何であれ、日本放送出版協会がテキストを細かく校閲していないことになる。

同じ講座を、今年度上半期は四十歳代の韓国人講師が担当している。そのテキスト五月号のステップ²⁶、例文の日本語「わたくしは韓国人です」について、語句の説明には「저 わたくし（나《わたし》の謙讓表現）」とあって、

細かい心遣いをしている。だが、放送では対訳文を「ワタシ……」と読んだ。ステップ²⁷では、例文「私の趣味は旅行です」の「私」もワタシと読まれた。語句の説明には、「저 私の」とある。せつかくの心遣いが貫徹していないように見える。このたぐいは多い。

朝鮮語と日本語の現在の一人称詞を対比させると、おおよそ次のような関係になる。

（常体語） 나……わたし、「」（一般的な一人称語）

（謙讓語） 저……わたくし「私」（畏まったときの語）

現在の日本に「わたし」を表記する漢字はないので、多くの日本人は「私」で代用している。事情を知らぬ外国人は代用を正統と錯覚して、先に挙げたような書き方をする。表記において韓国人の日本語はさかさまになっているのである。

四 日本放送協会の不思議

日本放送協会は、国語審議会の答申による内閣告示を遵守することが原則であるように見える。例えば昨秋の放送で、民間放送の字幕が「炭疽菌」としたのに、この協会は

「炭そ菌」で通した。混ぜ書きの醜さよりも常用漢字の枠に従つことをよしとするのだらう。だから、秋の川を鮭が「そ上」し、役所が情報を「秘とく」し、会社が経営「破たん」するのである。

この方針によるなら、「私」は「わたくし」の訓を負うて用いるべきであらう。しかし、理由は知らないが、この協会では昔から、これを「わたし」の訓で用いつづけてきた。ラジオ番組「私たちのことば」「私は誰でしょう」「私の本棚」、テレビジョン時代にも「私の秘密」「私の青空」「聞いてください、私の人生」など書き出したらきりがない。番組名においてしかり、放送の中では推して知るべし。テレビジョンの字幕も徹底して「わたし」と読んできた。これは当用漢字時代から変らぬ方針らしい。何ゆえにこの文字だけ原則を曲げるのか、わたしには理解できない。

七月十六日朝、六時四十分過ぎのラジオで、ヨーロッパ歴訪中の天皇と皇后がウィーンで夜の音楽会を楽しんだことを報じ、天皇の談話を直接話法で伝えた。その中に「わたしは云々」とあった。今上天皇が一人称詞「わたし」を用いるのをかつて聞いたことがない。軽々に原因を論断することはできないが、原稿にあった「私」をアナウンサー

がワタシと読んだものではあるまいか。この協会の日本語では、「わたし」と「わたくし」に差がないらしいのだから。

その背景を日本放送協会「1981」に探った。まず、「ことばの表記について」と題する総論があり、「原則」の「9 ひらがなで書くことば」がある。(原文は横組み)

(1) 常用漢字で書けない語は、原則としてひらがなで書くが、そのほか次のような語は、なるべくかな書きにする。「」内の漢字は使わない。

(一) 文省略

代名詞 わたし 私^(注6) おのおの(各)(以下省略)

(注6) 名詞としての「私」(ワタクシ、「公」の対語)や「ワタクシ」と読む代名詞は漢字で書いてもよい。常用漢字表では「私」に「ワタシ」の訓はない。

表向きは内閣告示の遵守を謳いながら、「私」については完全に無視しているのである。ラジオ講座のテキストが校閲できないことも道理である。

わたしはこれを些細なことだとは考えない。まず、テレビジョン放送が聴取者の日本語に及ぼす力の大きさがある。

聴覚障害者のための「被せ文字」が急速に増加している現実もある。文字と音声の乖離は早急に解消しなければならぬ。新聞と放送は、学校教育を終えてからも多くの人が接する報道媒体である。その新聞が日本語の破壊者の一面を有することを、むかし、工藤「1978」に書いたことがあり、先年は呆れはてて新聞の定期購読をやめた（工藤「1988」）。公共放送までもかくあつては、この国の言語の未来は暗い。

なお、昭和天皇の一人称詞も「わたくし」であつた。『言語生活』の最終号、すなわち四百三十六号「1988」の、投稿で構成する「目」欄に次の文章があつた。

見坊豪紀「新ことばのくずかご」によると、天皇は、自分のことを「朕」と言うが、ふつう、天皇の「お言葉」は、主語がないように作られている、とのことである。

ところが、一月二日NHK総合テレビの午後七時からのニュースを見たら、皇居一般参賀で、天皇は次のようにおっしゃっていた。

新年おめでとう。みな元気な姿に接し、喜ばしく思います。わたくしの健康について心配してくれてあ

りがとう。（以下略）

ちなみに、朝日新聞一月三日朝刊一面では、傍点部が「私の健康」となっていた。（武蔵野市 森谷朗さん）

五 国語政策の誤算

敗戦後、時をおかずに実施された国語政策の数々、中でも当用漢字の音訓表は、振仮名なしで読める日本語表記をめざしてなされた。同訓異字を減らすことに努め、漢字一つが負う訓も徹底的に絞った。その結果、訓を持たない漢字が、全体の三割余も生まれることになった。形、音、義は、漢字を表語文字たらしめる三要素。その一要素「義」は日本では「訓」に相当する。それを認めないということとは、意味の知らない漢字をやたらに殖やす結果になった。そのことの批判はここでは控える。

さて、漢字「私」は、音「シ」、訓「わたくし」と定められた。だが、この「わたくし」は、人称詞のそれではなく、抽象的な名詞「公」に対する「私」の訓なのであつた。「私事」「私する」の「わたくし」である。音読みが一般の「私立」「私企業」も、誤読を避けたいときは「ワタクシ

…」と読まれる。使用をそこに限定したいというのが国語審議会の本音であった。

『当用漢字音訓表』には「使用上の注意事項」が六つ付いていた。その二つめが(ロ)「代名詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞は、なるべくかな書きにする。」である。本稿で「人称詞」と書いている代名詞「私、我、我々、彼、彼女、君、お前」などは、漢字表記すべきではないというのであった。改定された『常用漢字表』では右のように制限してはいないが、時すでに遅し。国語審議会の大きな誤算であった、とわたしは見る。そもそも、内閣告示を自分の文章表記の規範にする国民はどれほどあるだろうか。生真面目な公務員と、新聞・書籍・雑誌の編集者くらいのもではあるまいか。学校の教師だって危ういものだ。それが証拠に、右に並べた人称詞は、今なお漢字表記されることが決して少なくない。

『当用漢字音訓表』の五年後に審議会が建議した『これからの敬語』も誤算を増幅させた。その中に「自分をさすことは」として次の項目などがある。

1 「わたし」を標準とする。

2 「わたくし」は、あらたまつた場合の用語とする。

つまり、日本人の一人称詞に「わたし」の使用を勧めながら、それを書き記す漢字を用意してないのである。

岩波書店の広報誌『図書』の三月号に、荻野アンナの『けなげ』という小説の広告が載った。そこには、「負けそうで負けない女たちの「私たち小説」の文言が添えられている。日本の高校生は国語の教室で、近代日本の小説に「私小説」という領域のあることを教わる。シ小説と読む人もあるが、ワタクシ小説が正統な読みかただ、という注意とともに。すると、右の広告の文言は「ワタクシタチ小説」なのだろうか。石原千秋氏は、新刊の『大学受験のための小説講義』(ちくま新書)で、二箇所「私小説」と仮名を振る配慮を示している。石原氏もきつと被害者のひとりなのだ。

特に言語の実際が規範どおりに運用されることはほとんどない。むしろ規範から少しずつずれて用いられるうちにそれが一般になり、やがて新しい規範になる可能性を獲得する。表記の領域でそれを獲得しそうな語を見ると、衝突は回避されるのが一般である。例えば、名詞「におい」を「臭い」と書いたものが氾濫するが、本来の「臭い」は形容詞なので、文脈によって誤解・誤読は回避される。「創

を動詞「つくる」に当てる誤用についても、本来の訓というべき「創める」とは、送り仮名の違いによって誤読が回避されている。それに対して「私」のばあい、ワタクシから語中の一拍だけが脱落してワタシが生まれ、意味も異ならず、他の漢字とは事情が異なるのである。

六 一人称詞の歴史点描

人称詞ならぬ「わたくし」は、萬葉集の旋頭歌「住吉の小田を刈らす子奴かもなき 奴あれど妹がみためと私田茹（一二七五）」の結句を、音数律からワタクシタルとよむ訓に見えるのが古い。この訓は、「公田」に対応する訓として契沖が提唱したものであつて、古写本の訓はシノヒタルカルであつたのだが、「私」をワタクシと読むことは、その他の古代文献に散見する。『類聚名義抄』（観智院本）の「私」には、筆頭の訓ワタクシのほか、ムコ・ヒソカニ・カクルなどがある。人称詞としての用法は鎌倉時代に始まり、男女ともに丁寧な言い方として、多く目上の人に対する場面で用いられた。狂言には、太郎冠者が「身ども」と言つたあとで「わたくし」と言い直したり、「わた

くし」と称すべき相手に、酔いのせいで「身ども」と称したりする話がある。興味深い現象である。

「わたくし」から「わたし」が派生するのは割に新しく、『日本国語大辞典』第二版は初出を元禄時代の教養書『男重宝記』（1693）とする。巻之五の三、「かた言なをし」条の「わたしは、わたくしなり」がそれである。「わたし」は片言と認識されていたのだが、これは新語が甘受しなくてはならない宿命でもあつた。『男重宝記』の前年に刊行された『女重宝記』（1692）の「女ことばつかひの事付けたり大和詞」条に、「わたくしもおなじ事と云を、みども同前といふは男らし」。『（一之巻の五）』とある。俗語「わたし」はまだ女性社会には滲透していなかったのだろうか。それから一世紀余、文化年間に刊行された式亭三馬『浮世風呂』（1809）には、成育地も職業も身分も異なる人々の話し言葉が活写してあり、丁寧な振仮名によって知られる一人称詞はじつに多彩である。例えば子もりの小女おはるでも、相手によつて「私」「私」「わつち」を使い分けるといふうに（第二編巻之上）。

幕末の状況を、ヘボン『和英語林集成』初版（1861）に就いて見るべく要点を引く。

WATAKUSHI, ワタクシ, 私, pro. I, me; private interest, private, selfish.

WATASHI, ワタシ, 私, pro. coll. contr. of Watakushi, I, me.

(凡例抜粋 pro.: pronoun coll.: colloquial)

そして明治時代、二葉亭四迷『浮雲』は総振仮名印刷である。この言文一致体小説の振仮名がすべて著書の手になるとは断定しえないが、振仮名から作者の細かな配慮を随所につかぐことができ、他人の手によることを想定する必要はなさそうである。この作の第二篇で、文三、お勢、その母お政、女中お鍋の間で交される一人称を見ると、お鍋はお勢に対して「私^{わたし}」、お政はいつも「私^{わたし}」である。お勢はお鍋と母に対して「私^{わたし}」、文三に対しては「私^{わたし}」である。文三はお勢・お政に対して「私^{わたし}」を使っている。見事な書き分けである。『浮雲』初篇には、『日本国語大辞典』第二版がやはり初出例とする「私^{あたし}」も見えている。「わたし」発生以来の使い分けは、基本軸を変えず、ごく緩やかに推移して現在に至っていると言えるだろう。

「私」の表記が固定したのちに、ワタクシから生まれたワタシである。当然、これを記す漢字のあるはずがない。

しかし、人々は何とかしてこの語に漢字を着せたいと思つたに違いない。そこで、親の衣裳「私」で間に合わせたのである。二葉亭四迷の総振仮名は、その間の事情をよく反映すると見える。国語審議会は、当用漢字で子が親の衣裳を借用することを禁じたのだが、最も頻繁に用いるワタシを漢字表記したいと言うのは人情であろう。ここに規範と人情との相剋が始まったのである。

七 二人の知事の一人称詞

今夏、報道のいろいろな場面に姿を見せることの多かった二人の知事、東京都の石原氏と長野県の田中氏は、一人称詞の使用がかなり対照的である。

石原氏の発言には四種の一人称詞を聞くことができる。それには、使用場面における氏の精神状況が如実に反映しているように思われる。すなわち、公的な場面、例えば議会の答弁などは「わたくし」で始めることが多い。それも途中から「わたし」に変わることがある。小人数の集まりや対談の席などでは「わたし」が用いられるが、興に乗ると自然に「ばく」が出る。記者会見の席などで怒りを投げ

付けるときは「おれ」である。畏まりから怒りへ、あるいは公的から私的へ、ワタクシ ワタシ ボク オレの序列が見て取れる。これは現代日本人のふつうの用法である。

一方、田中氏が「わたくし」以外の語を用いるのを耳にしたことがなかった。が、長野県議会による知事不信任決議案の可決に対する意思決定期限の七月十五日夜、テレビ朝日の「NEWSSTATION」で田中氏と東京のスタジオとの間にやりとりがあった。田中氏はふだんと変わらぬ静かな話し方で通した。その廿数分間のあいだに、「わたくし」と「わたしたち」を一度ずつ耳にすることができた。これだけの例で判断することは危険だが、田中氏は公人としての発言では、努めて「わたくし」を用いようとしていると見受けられた。

さて、石原氏の発言から分かるように、日本語には複数の一人称詞があつて、話者の置かれた社会的・精神的状況を反映するのである。時には生理的状況さえも。しかるにこれらの発言が文字化されるとき、右に見たような差異はすべて無視されるのが一般である。テレビジョンの狭い画面に発言を要約して示す「被せ文字」は言うまでもない。さよふな制約のない新聞・雑誌でも同様である。これは、

日本人の言語生活に著しい、文字優位の伝統のなごりである。

八 漢字文化圏の宿命

文字が主、音声は従であるとする通念の形成は、アジアの東の端に位置するこの列島が、漢字文化圏に組み込まれた途端に課せられた宿命だ、と言えるかもしれない。漢字の桎梏を脱しえた国がないわけでもない。ヴェトナムしかり、朝鮮半島の国しかり。日本も漢字を捨てることが主張されたこともある。その主張が実現していたら、音声为主、漢字は従となつたのだろうが、かかる思いは死児の齢を数えるようなもの。

その「あるじ」たる漢字は意味を伝える道具に過ぎない。これが日本人の通念なのだといえよう。その典型は、新聞などに見える三行^{シラフエ}広告である。これは音声化^{シニフアン}を期待せず、広告主の求めた意味だけが読者に伝われば用が足りる。それで広告としての機能は果たされるのである。しかし、人間の言語行動は物の売買・貸借だけではない。思想の表明、信念の吐露、心情の伝達などが圧倒的に多い。これらの行

動には、言葉のあやを彫琢し、微細な意味の違いを書き分けるために、時には表現者の命を削るような営みがなされる。

言語の自然として変わることを求め、表記は固定することによってその機能性が高まる。ここにさまざまなひずみが生ずる。話し言葉を正確に文字化する。これが戦後の国語政策の基本であつたはずである。一片の内閣告示が社会の隅々に滲透するとは考えがたい。人称詞ワタクシの使用頻度は、名詞ワタクシの比ではない。「代名詞は仮名書き」の原則によって、人称詞「私」を拒むことは、到底不可能と知るべきであつたのだ。そのうえで人称詞全体の表記について提言することこそ、国語審議会の努めではなかつただろうか。

漢字「僕」「君」はさらにはつきりしている。「僕」を「シモベ」などの訓で用いることは音「ボク」の使用の比ではなく、「君」を「クン」の音で用いることは訓「キミ」の使用の比ではない。わたしはかかる事情を考慮して、二人称の代名詞は「僕」「君」「わたし」「あなた」と対比させて書くことにしている。人称詞ワタクシも「私」でいい。名詞も「私」「公」と対比的に表記すること言うまでもない。

かくて、漢字どうし、仮名どうし、拍数も字数もきれいに対応するのである。

九 さかさまの国の日本語

人称詞の使い分けで小説などの人物造形に効果を發揮すること、実際の談話でその人のその時の状況を映すばあいのあることは先に述べた。それを無視して、一人称詞を「私」ひとつで表記することは無神経の極みだし、ワタクシのつもりで書いた「私」をワタクシと読んで平気なのは、外国人の誤用と同じ次元の日本語だということになる。これらはまだ罪が軽い。じつは、第四節で触れた被せ文字にも通ずる、切実な事態があるのである。

ある町で点訳奉仕をしている人の話では、その組織では常用漢字音訓表に従つて「私」は「ワタクシ」と点訳する原則だという。規範主義である。実際に耳にする日本語はワタクシが圧倒的に多いのに、点訳には反対にワタクシがほとんどということになる。同じ町に住んで朗読奉仕をしている人の話では、その組織は全県一律に「私」は「ワタクシ」と読むことにしているという。現実主義である。かく

して、深く考えられたに違いない天皇の公式談話記録の「私」がワタシと朗読され、盛り場を徘徊する少女の稚拙な会話の「私」がワタクシと点訳されるのである。こんなことは日本じゅうに溢れているに違いない。赤信号もおおぜいで渡ると青信号なみの価値をもつ。規範と現実とのこの大きなずれについて、初等教育や外国人教育の教室ではどのように教えているのだろうか。

散文は意味を伝えることに主眼がある、朗読によつて作品の味わいが変わることは少ない、一般にはそう考えられているようだ。だから「私」をワタクシ・ワタシのいずれに読むか、いちいち詮索はしないのだ。「私」の文字をどう読むかを考えずに書くのんきな作家もあるだろう。八月七日の昼下がり、町の図書館でわたしはその実例に遭った。またまハイビジョンシアターという部屋に入ったら、日本放送協会デジタルハイビジョンの放送『よみがえる作家の声』が始まったのである。島尾敏雄の自作朗読で、実験に基づく『出発は遂に訪れず』が読まれた。著書の文字も画面に映り、五回出現する「私」の読み方は、ワタクシが二回、ワタシが三回であった。すべて作品の語り手すなわち作者の言葉としての使用である。

詩の表現は少し違う。中原中也の「また来ん春と人は云ふ／しかし私はつらいのだ」では、拍数から見るとワタシなのだろう。しかし、安西均『花の店』を開くと、四十三の詩篇に一人称詞は「ぼく、我、われ、わたし、あたくし、わたくし、私」と多彩で、「あとがき」の中は「私」である。はたして「私」はワタシでいいのか。八木重吉となるとさらに神経質にならざるを得ない。『貧しき信徒』には、「日はあかるいながへ沈んではゆくが／みてゐる私の胸をうつてしづんでゆく」（「日が沈む」のあと、短い五篇、廿四行を挟んで「かなしみと／わたしと／足をからませてたたとととゆく」（「悲しみ」）がある。一篇だけ見て読めたとは言えないことになるのだ。

おわりに

以上、現代日本語の一人称詞において、表記と読みがさかまになる事態の出来^{しった}したことを中心に述べた。その責めを国語審議会だけに負わせるわけにはゆかないが、対策を講じないことは責めてもいいだろう。

日本語のさかさま現象はこれのみではない。雑誌の標題

の英語はもう陳腐なこと。それに感染したテレビジョン番組の標題には、日本語のほとんど出ないものも多い。珍しくもないが、あえてそれをここに記録しておきたい。第七節に引いた「NEWSSTATION」の八月の放送では、^{タイトルバック}標題の背景に「August」「today's menu」「sports」と、時刻を示すアラビア数字が次々に出現し、途中になぜか「vocal: サラ・ブライトマン」と、歌手の名だけが邦字で書かれ、最後に「NEWSSTATION」と出る。英語の放送かと思うとさにあらず、キャスターが現われて日本語で話し始めるが、番組名が日本語で告げられることはない。広告が始まる前には「COMING UP」が出るし、天気予報はむろん「weather」であらう。

工藤「1999」で述べた、数の表記において三桁ごとに点を打つことも、国語政策で奨励したさかさま現象である。日本人の氏と名の順序をローマ字で逆に書く人が多いのは日本語を英語の論理で運用したと推測されるさかさま現象であるが、これは本稿の範囲を超える。また、工藤「2000」に書いたことだが、外国の王族や元首と日本の皇族とを同一文脈で報道するとき、内なる皇族だけを尊敬語で待遇するのは、日本の敬語表現の原則をはずれたこと、

これも一種のさかさまである。学校生徒の母語の鍛練より英語の学習をたつととする近年の風潮は、その最たるものかも知れない。かくて日本語に関する限り、わたしたちはさかさまの国に住んでいることを悟らねばならないのである。

文 献

朝日新聞社「1989」『^{新訂}増補朝日新聞の用語の手引』（引用は第七刷による）

金田一春彦「1992」「ガ行鼻音論」（引用は同氏著『日本語音韻の研究』による）

工藤力男「1978」「新聞の用語における見出しと本文の間」（『言語生活』三百十七号 筑摩書房）

工藤力男「1999」「現代表記の論理と美学」（『成城国文学』十七号）

工藤力男「2000」「ねじれた敬語の国、ニッポン」（『こべる』八十四号 阿吽社）

中原道幸「2002」「宣長さん 伊勢人の仕事」（和泉書院）

日本放送協会「1981」「NHK編新用字用語辞典」（引用は第十三刷による）

三島由紀夫「1959」『文章読本』（引用は中公文庫による）

水谷 修「1987」「地方で出現するガ行鼻音」（『言語生活』四百二十九号 筑摩書房）

柳田國男「*ボクとワタクシ*」(『赤とんぼ』五月号 引用は『定本柳田國男集』第十九卷による)
『女重宝記』[1882] 東横学園女子短期大学女性文化研究所叢書『*女重宝記*』下 本文編 による。
『男重宝記』[1883] 長友千代治校註『女重宝記・男重宝記』(現代教養文庫) による。

追記

ツルゲーネフ作『はつ恋』の神西清訳は、変な日本語の多い訳業だが、中には貴重な訳文もある。主人公の青年が両親と夏を過ごした借りあげ別荘、その傍屋に移ってきた公爵夫人からの挨拶状は、「いかにも無学らしい文章に加えるに汚らしい筆跡」で書かれていた。翻訳文でそれを伝えることは至難だろうが、役者はそれを、「卒事ながらわたしこと」などと工夫している。ここには、「わたくし」と「わたし」の差がうまく生かされている(引用は新潮文庫版の八十四刷による)。

丸善の月刊広報誌『學燈』の紅野敏郎[1888.10] (『學燈』を読む(128)——高橋義孝)によると、高橋義孝[1873.11] (『国語のこと』) には、自身の翻訳書を改版する際に出版社が作った原稿を見て、「変り果てたる姿かな」と叫びたくなった思いに続けて、国語政策批判が展開されている。特に「音訓表」への恨みが激しく、次のように書いている。

今日では今日が「きよつ」とは読めないで、「こんにち」としか読めず、「私」を「わたし」「わたくし」と読んではずらず、「私」は「し」としてしか読めないらしい。

怒りの半分は肯なえるにしても、振仮名のない「今日」「私」について、著者の期待する読みはいかにして保証されるだろうか。そこへの配慮なくして文筆家の資格はない。旧臘、学内で開かれた渡辺実氏の学術講演「日本語の意味領域」を聴講した学生の感想文が手もとにある。その一篇は紹介する価値があるだろう。その講演で、日本語には多くの人称詞があることに言及したくだりについて、「ぼく、俺、私、私くし」という記述が二回見える。国文学科二年次の学生の文章としては情けない限りだが、「私」を「わたし」の正当表記と錯覚して、しからば「わたくし」は「私くし」とでも書くべきだと考えたのだろう。この学生に好意的に解釈すると、彼も日本語表記の現実の被害者なのだと言える。

(成稿後の偶見を初校のおり余白に記す。一千三年一月)